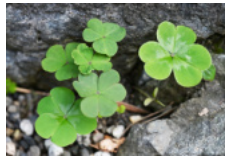


はらから

寺庭の草引きをしていると、

新しい草を見つけていることがありますが。数年で見かけなくなることとあります。その中で、昔からあるのがムラサキカタバミです。クローバー(しろつめ草)に似た葉ですが花は違います。

草引きと言えばムラサキカタバミといえるほど、抜いても抜いても生えてくる繁殖力の強い草です。



ところが、そのカタバミが猛暑のせい今年は、春はともかくそれ以降非常に少なくなりました。草引きの時間が省けるのは助かりましたが、繁殖力の強いこの草すら気候変動についていけないのかと心配になりました。他に、毛虫が少なくなりました。庭師さんは蜂が少なくなつて一回も刺されなかったと。

こんな所にも、地球の危機の

〒五〇〇〇四三

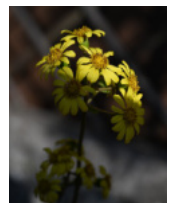
大津市中央一丁目一三二

電話 〇七七一五二一七六四六

住職携帯 〇九〇一七八七七一六四七

Eメール eijunji2020@gmail.com

ホームページ



ツワブキの花

一端が現れている気がしました。

除夜会 (除夜の鐘)

夜九時〜十時半まで

十二月三十一日除夜会を執り

行います。ここ最近、近隣の

方を含めて百名以上の参拝です。

どなたでもおつき頂きますので、

お誘い併せてご参拝下さい。

丸屋町側、駐車場側どちらか

らでもお越しいただけます。

新年参拝の案内

お正月は随時参拝と致してお

ります。ご家族皆様で随時本堂

にお参り下さい。

元旦 午後一時〜四時

二日 午前九時〜正午

忘年会

十二月十五日(日) 十七時

場所…マルレ(中央二丁目)

南無の会 場所…本堂

・親鸞聖人の生涯③

十二月十五日(日) 十四時〜十六時

・親鸞聖人の生涯④

一月十九日(日) 十四時〜十六時

・特別バージョン(調整中)

二月十六日(日) 十四時〜十六時

・正信偈講座①

三月九日(日) 十四時〜十六時

春の彼岸会 Oshichi no Tsuki

三月二十三日(日) 十時〜十三時

講師…三上明祥氏(堅田・本福寺)

《その他の行事》

◇成道会

十二月十日(火) 一時〜

場所…ピアザ淡海ホール(無料)

講師…石山寺管長

鷲尾龍華氏

講題…『石山寺縁起絵巻』で読

む観音さまの話

◇真宗のつどい

二月二十二日(土) 受付十二時

場所…野洲文化ホール

講師…釈徹宗氏(相愛大学学長)

講題…「親鸞聖人の生涯に学ぶ」

◎参加ご希望の方はお寺まで。

親鸞聖人の生涯②

「南無の会」では、『正信偈

講座』に入る前に、聖人の生涯についてお話をしています。参加者にはテキストをお配りして

いますが、折角ですので、そのテキストを何度かに分けて、

『はらから』に掲載することに

しました。ホームページの「ぶ

つブツブログ」にも掲載しています。また、YouTube で動画配

信もしています。合わせてご覧

いただければ幸いです。

前号では、親鸞聖人ご誕生前夜の政治・社会の状況について簡単に見ました。今回は、仏教の

伝来から平安時代までの様子を見ておくことにします。

◇仏教伝来

「新たな「神」との出会い」

日本への仏教公伝は、六世紀の飛鳥時代、朝鮮半島の百濟から釈迦如来金銅像と経典などが欽明天皇に献上されたことに始まるとされています。自然現象の背後に神の存在をみていた人々にとつて、黄金に輝くその仏像は、初めて見る外来の「神」でした。この神を祀るかどうかで崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏が対立しましたが、最終的には朝鮮半島の情勢に詳しく渡来人とのつながりの深い蘇我氏が勝利を収めました。

仏教の伝来は、当時の日本にとつて新たな宗教の移入に止まるものではなく、明治維新の文明開化に匹敵する先進文化との出会いでした。

『日本書紀』によると、百濟の聖明王は大和朝廷に僧を献上して三々六六ごとに交替させたようですが、そこには、学問僧の他に、呪禁師(じゅげんし)、

造仏工、造寺工、画工、瓦博士なども含まれていました。呪禁師というのは、呪文を唱えて悪気をはらい、病氣や災難を除去する一種の占い師のことですが、当時の「先進科学」でした。これらは古代社会においては政治と直結するものでした。

◇仏教への傾倒

「豪族・天皇」

最初、仏教を積極的に取り入れたのは蘇我氏を筆頭とする豪族でしたが、飛鳥時代の七世紀中頃にもなると、天皇も仏教の導入に積極的になっていきました。その傾向は六四五年の大化改新以後はますます強まり、天智天皇、天武天皇をはじめ歴代の天皇、新たに宮廷に進出した藤原氏(藤原鎌足の子孫)も寺院を建立し、一族の安寧を僧尼に祈らせました。

◇現世利益の期待

天智天皇は、大津京近くの崇福寺(六六八年)など数か寺を建立しました。弟の天武天皇は、持統皇后の病氣平癒を願って薬

師寺を建立(六八〇年発願)しました。

こうして、仏教は天皇中心の律令国家の建設と歩調を合わせて政治・文化の両面において浸透していききましたが、病氣平癒や除災招福などの現世利益を祈る仏教に変わりはありませんでした。

仏教は本来人間の内面を問うていく宗教ですが、そのような仏教理解に至るには平安時代の最澄、より本格的には法然、親鸞ら鎌倉仏教の祖師の出現を待たねばなりません。ただ、推古天皇の治世に政治に深く関与し、天皇中心の中央集権国家の形成に寄与した厩戸皇子(聖徳太子)は、仏教を内面的にも理解した数少ない人物でした。

◇厩戸皇子(うまやどののおうじ) (聖徳太子)と親鸞聖人

「厩戸」というのは、母親

(穴穂部間人皇女)が散歩中に厩(うまや)の戸に当たった時に生まれたことからそう呼ばれるようですが、ここでは聖徳太子という名前を使います。

聖徳太子について触れるのは、親鸞聖人が太子を大変敬慕されていたからです。聖人が比叡山延暦寺を出て法然聖人の元に行く決心を促したのは、夢に現れた救世観音菩薩(聖徳太子の本地(本来の姿)とされる)の示唆によると言われています。また、聖人は十一首からなる『皇太子聖徳奉讃』を作っておられますが、その中で、

和国の教主聖徳皇

広大恩徳謝しがたし……

〈訳〉日本の釈尊ともいおうべき聖徳太子

その広大なご恩と徳は感謝してもし尽くせません

とよまれています。仏教で

「教主」は、釈尊を指しますから、どれほど、尊敬されたかわかります。いったい聖徳太子とはどのような人物だったのでしょうか。

◇聖徳太子の登場の背景

聖徳太子は用明天皇を父とし、穴穂部間人皇女(あなほべのはしひとのこうじよ)を母として

西暦五七四年に生まれます。用明天皇の祖父は蘇我稲目で当時強い権力を持っていました。

太子十四歳の時、父用明天皇が即位二年でなくなり、同年、排仏派の物部守屋が蘇我氏と争い戦死します。十九歳の時、

崇峻天皇(太子の叔父)が、蘇我馬子(崇峻の叔父)にそそのかされた東漢駒(やまとのあやのこま)によって暗殺されま

す。その東漢駒は馬子によって一族皆殺しにされています。かわって即位したのは崇峻天皇の異母姉の推古天皇でした。その摂政(今で言うところの)にいたのが、崇峻・推古の甥であった聖徳太子でした。

◇聖徳太子の仏教

太子が摂政となって(五九三年)最初の政治活動が「仏教興隆の詔」の宣言であったのは、このような経緯による部分もあったでしょう。十一年後に発布される『十七条憲法』(六〇三年)が「和を以て貴しとなす」で始まるのも太子の強い思いが感じら

れます。

聖徳太子の仏教に関わる業績として、四天王寺(五九三年)や法隆寺(六〇七年)の建立もさることながら、仏教の内的理解という点においては『十七条憲法』の制定や『三経義疏』が注目されます。

◇「十七条憲法」

その第二条で次のように述べられます。

篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。…いきとし生きるものは、この教えに従うべきであり、世界の究極の法である。そもそも、人間は最初から悪人であるものは少ない。三宝に帰せば悪を直すことができる

つまり、すべての国が仏教を究極の拠り処とすべきだといわれたのです。

◇「三経義疏」

これは『法華経』『勝鬘経』『維摩経』という三つのお経の

注釈書のことです。『勝鬘経義疏』では「人は、もともと聖人・愚者の別なくすべて平等の仏子であり、人の行うすべての善(道徳的な善も含めて)は、成仏につながる」

(以上『日本宗教史』による)とされています。ここには一切の衆生を救う大乘仏教の精神、在家仏教の萌芽が見て取れます。



太子が語ったとされる次の言葉も仏教の精神がはつきりとうかがえます。

世間虚仮唯仏是真
世間は虚仮なり ただ仏のみ真なり

〈訳〉この世はうそ偽りに満ちて空しく、ただ、仏とそとの教えのみがまことである。

太子の人物像をかいつまんで見てみましたが、これだけでも、仏教の呪術的、現世利益的な受

けとめとは異なり、本来の仏教理解をされていたことがわかります。これらが親鸞聖人が聖徳太子を敬慕された理由といえるでしょう。

現在、浄土真宗の寺院の右の余間に聖徳太子の掛け軸を欠けるのは、そういう背景があるからなのです。

◇奈良時代の仏教

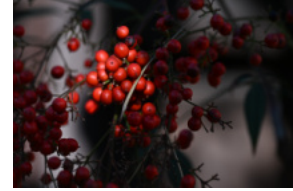
本来の仏教理解を示した聖徳太子は例外的な存在であり、天皇を初め豪族たちが仏教に求めたのは、自らの一族の病気の平癒や災難の除去など現世利益でした。

しかし、八世紀になり奈良時代に入ると、これまで天皇家・豪族ら自身の現世利益の追究であったのが国家的な規模に拡大され、天皇制国家の安寧を祈るための仏教、国家仏教へと変化していきま



◇「僧尼令」〜僧侶の統制〜

それがはつきりと現れるのが、七〇一年に發布された『大宝律令』の「僧尼令」です。僧尼になる数が毎年朝廷によって定められました。これを年分度者ねんぶんどしゃといいます。僧侶になるための儀式を「得度とくど」といいます。その数が寺院の側ではなく朝廷によって定められたのです。



当時の僧侶は「官僧」と呼ばれ、一般の法ではなく、『僧尼令』によって管理統制されました。悟りを得たと嘘をついたり、占いで偽りを説いたり、寺院の外で庶民へ教化活動したりといったことは重罪となり、最も重い「還俗刑げんぞく」が課せられました。「官僧」身分の剥奪です。官僧は課役の免除などの特典や身分の保証がありましたから、還俗

させられるのが重い罰となるのです。

◇国家仏教の成立〜鎮護国家思想

上に述べたように、これまでの仏教が天皇家や豪族の現世利益の祈願に重点があつたのに対して、奈良時代になると、それが国家的な規模に拡大され、天皇制国家の安寧を祈るための仏教、国家仏教へと変容していったのでした。仏教は国家を護るための役割をもつという考え方を鎮護国家思想といえます。

このことは聖武天皇(在位七二四〜七四九年)の発した「国分寺創建の詔」(七四二)と「盧舍那大仏造立の詔」(七四三)に端的に表れています。發布されたきつかけは、朝鮮半島の新羅しらぎの侵攻の懸念や、疫病(天然痘?)が全国的流行という危機的状況がありました。

◇「国分寺創建の詔」〜護国の

お経 『金光明最勝王経』〜「国分寺創建の詔」は、全国

に国分寺・国分尼寺を建てて、塔に『金光明最勝王経』を安置し誦誦することを求めました。『金光明最勝王経』は、この経を敬って誦誦するところでは四天王をはじめとする諸天善神が国を護つてくれるという護国の思想を説く經典です。国分寺の正式名称である「金光明四天王護国之寺」はこの經典に由来します。

国分尼寺は正式名称を「法華滅罪の寺」といい、『法華経(妙法蓮華経)』を安置、誦誦することが求められました。

『法華経』は、鎮護国家を祈る經典でもあり、また、当時成仏しがたいと見なされていた悪人や女人の成仏を明らかにしている經典とされています。後で触れますが、日本天台宗



を開いた最澄もこの『法華経』を根本聖典としました。

ただ、この詔では、内憂外患から国と民を護るとしつつ、後半では、歴代天皇と藤原氏らの忠臣の霊の救いと、天皇家・藤原家・橘家などの安穩、朝廷に敵対するものの絶滅という願いも含まれていました。それが、次にお話する盧舍那大仏造立の詔との違いです。

今回はここまでにします。次回は、「盧舍那大仏造立の詔」が発せられ、仏教の国教仏教化が完成するところから、最澄の出現にかけてお話しします。